「DEATＨCOOD:HOWLING」

カオスザイン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公昼神十七夜は三年前に起きてしまったある事件によって恋愛を遠ざけるようになってしまう。

そして人々が超能力に目覚め出した現代ある日彼はある出会いを果たすが・・

目次

プロローグ ―――――― 1
EP1「起きた惨劇と・・」 ―― 3
EPⅡ「悲しみでの目覚め　前編」 6
EPⅢ「悲しみでの目覚め　後編」 9
EPⅣ「三年後のとある日1」 ― 12
EPⅤ「三年後のとある日2」 ― 15
EPⅥ「何気なく回り始めた日々」 20
EPⅦ「絶つ者」 ―――― 24
EPⅧ「絶対なる鼓動の共鳴その1」 27
EPⅨ「絶対なる鼓動の共鳴そのⅡ」 30
EPX「輪」 ―――― 34
EP11「巻所1」 ―――― 38
EP12「巻所Ⅱ」 ―――― 41
EP13「巻所Ⅲ」 ―――― 43
キャラクター設定集第0部 ―――― 49

プロローグ

人には誰にだって思い出したくはない過去があるはず。〜〜俺、昼神十七夜にだってそんな過去あるさ・・・でも他人とは比べ物にならない程の酷い過去なんだ・・・・。

〜それは俺が中学二年、三年前の冬の季節、イヴから始まった〜

「わーてるって、忘れていないって」

「ホントに？必ず来てよね」

「ああ！絶対約束する！」

俺には彼女がいた。名前は西条真奈夏、俺と同年。

俺は彼女と彼女の家でクリパをする予定があった。

「それじゃまた明日な」

「「うん！」」

この時の俺はなんて馬鹿だったんだろう・・・・。

カチャン・・・・・ケータイを閉じた音が部屋に寂しくこだました・・・・。

「・・・十七夜君と私の世界に他の人はいらない・・・だから私が消してあげる！・・・・」

そう言って彼女は両手にナイフと拳銃、両膝に改造したスタンガンを仕込ませ、彼女

にとっての邪魔者が来るのを待っていた。
～クリスマス当日の夕方五時半頃～
「ゲッ!?ヤッベ!?昼寝してたら寝過ごしちまった!早く・・・・」
ピーピーピロリー
「こんな時に限って一体誰だよ?空気読まない奴は」
それは別クラスにいる悪友の良田阿久富からだった。
「ハア・・おい、良田今日俺が彼女とクリパやるって知ってんだろうが!嫌がらせか?もしそうだったら・・・・」
「違うんだ昼神!お前の彼女って隣町の二番街の二番目の家に住んでんだよな?」
「ああ、そうだが」
「「俺、今お袋のお使いで隣町来ているんだがそこから叫び声が聞こえてきたんだよ!」」
「なんだって!?」
「「俺はとりあえず様子を確かめてくるからお前も早く・・・・うわがっ!?・・・・・・」」
ビリビリッ!
「!?おい!?良田どうした!?何があったんだ!?・・・」

ＥＰ１「起きた惨劇と・・」

「なんなんだよこれは!?・・・・」
　真奈夏の部屋の周りには血があちらこちらにと飛び散っていたのだ。
「ヒッ!?・・・・」
「君は成瀬さん!?」
　俺のクラスメイト女子の成瀬桜が震え怯えていた。
　しかしなぜ成瀬さんが真奈夏の家に!?
「友達に呼び出されてここへ来たんですが・・・・」
「・・・おい！いなりや、これ見ろ！」
　良田に言われた方を見ると・・・・
「!?・・・・」
　死体があった・・・しかも全員俺のクラスメイト女子だ。
　一人は胸を刺され、二人目は銃で撃たれたのだろうか？三人目はバラバラだった。
「来てくれたんだね十七夜君・・・・」
　背後に血まみれの真奈夏が立っていた。

手には血の付着したナイフと拳銃がしっかりと握りしめられていた。
「まさか・・・・真奈夏、お前がやったのか!?」
「私と十七夜君の世界に他の女はいらないわ・・・・」
言い忘れていたが、真奈夏は別の学校に通っている。
だから俺のクラスメイト女子の連絡先を知るはずが・・・・
「何を思い違いをしているんだ!?」
断じて俺は浮気などしていない。
「あははっははは！」
狂っている・・・・
「いなりやお前とんでもなく厄介なのを彼女にしたな・・・・思い込みが激しく無関係の周りの人を巻き込むヤンデレタイプかよ・・・・」
「・・・・！真奈夏！」
「そこの奴死んで！」
ドギュン！
「くうっ!?・・・・」
!?・・・・」
良田が先に動いて成瀬さんを守った。

「どいてよソイツ殺せない・・・今その子守ろうとした?・・・・」
　誰が彼女を傷付けてしまっていたのか?・・・俺なのだろう・・・
「真奈夏ー俺は・・・・」
　俺が彼女にかけようとした言葉は彼女の最後の一言で掻き消されてしまった。
「私のこともういらないの?・・・・十七夜君・・・・」
　スッ・・・・ドギュン!
「!?・・・・」
「ウ・・・・ソ・・・・だろ!?・・・・」
「ごめん・・・・ね・・・・」
「真奈夏ー!!」

ＥＰⅡ「悲しみでの目覚め　前編」

「真奈夏ぁーー!」
　嘘だろオイ・・なんでこんな事態になっちまったんだよ!?・・
　俺は急いで真奈夏に駆け寄る
「真奈夏!オイ!なんでこんなこと!?・・」
「・・十六夜君・・ゴフゴフッ!?・・ごめんね・・」
　吐血がなお一層激しくなる
「救急車はまだなのか?!良田」
　いくらなんでも遅すぎる・・このままじゃ真奈夏が本当に死んじまう・・今ならまだ間に合う筈なのに・・
「今さっき呼んだ!だけど後一時間はかかると」
　なんだと!?
「そんなに待てる訳ないだろ!もういい!俺が連れていく」
「だな」
　だが・・

「・・十六夜君・・」
「オイ・・真奈夏喋ると・・」
「もういいの・・これは私自身が想いを諦めてしまっていたのだから・・・・・」
　そう言い残して真奈夏は目を閉じてしまった
「真奈夏ぁー!」
「・・いなりや・・これはもう病院での蘇生措置でも生き返る保証は無いに等しいと思う・・」
「良田テメエ!なんでこんな状況でそんな冷静な判断ができるんだよ!?」
「俺だって恐怖を感じてる!」
「テメエ!」
「殴りたいんだったら殴れよ!」
「ッ!・・・」
　俺は良田に殴りかかろうとしたがなんとか抑えた
「後は奇跡が起きてくれるのを待つしかない・・」
　そして一時間後ようやく病院で治療を施してもらったが奇跡なんてものは微塵も起きず真奈夏は本当に死んでしまった
「うあああああああああああああー!・・」

俺はこれ以上にない悲しみで涙が枯れる程に泣きわめいた
それから真奈夏と真奈夏によって殺された三人のクラスメイトの葬儀の二日後まで彼女の死がもたらしたかのように・・
「なんだよコレ!?・・・」
俺を含め一部の者が超能力者なるものに目覚めていたのだ

ＥＰⅢ「悲しみでの目覚め　後編」

真奈夏達の葬儀の二日後
ガン！バキッ！
「ウグッ！・・・」
「お前も人殺しの片棒担いでんだよなあ～ああ？分かってんのか」
俺は学園でイジメの格好の的になっていた
だがコイツ等は被害者の事など微塵も思っていないただイジメるネタが欲しいだけの下衆の不良連中だ
「ほおらよぉ！なんとか言ってみろよ」
「グッ!?・・・」
だけどこんな奴等に対して何も言い返せない自分が悔しい
「クッ！・・俺は・・俺はあー！」
悲しい・・力が欲しい・・
「ほらおらほらあー！」
「待て！なんか様子がおかしいぞ!?」

「なぬぅ!?」
「・・・」
不良達が何故か驚いている中、俺は意識が遠のいていったシュル！
「ウワッ!?・・・・・」
数分後俺の意識が戻ったら・・
「なんだよコレ!?・・」
不良数人がボロボロになっていた
何があったんだ!?
「ヒイッ!?こ・・コイツ超能力者か!?に・・逃げろぉ―!」
不良の下っ端が俺に向かってそう言い放つと逃げていった
「俺が・・超能力者!?」
手を見ると
「!?」
手からコンセントの差込口のような物とその中から紫の紐が出ていた
「これって・・まさか!?」
急いで教室に戻ると

「!?」
「何コレ!?」
「おお!?なんじゃコリャアー!?」
クラスメイトを含め学園全体の約半数が超能力者に目覚めていたのだ
まるで真奈夏の・・彼女の死がもたらしたかの様に

ＥＰⅣ「三年後のとある日１」

学園の約半数と世界の六割の人が超能力者として目覚めてから三年後の今現在の話に戻そう

高校二年になって

「ねえあの人って例の・・」

「アイツがか」

「・・」

俺が不良連中を超能力でボコった時からアダ名を付けられた

俺の能力から「デスコードハウリング」と

「いなりやー！今度は同じクラスのようだな」

「そのようだな」

「良田君！」

「おっ？どうやらアイツも一緒のようだな！」

あの事件の唯一の生存者である成瀬さんはその縁あってか良田と付き合っているのだ

「昼神君も一緒のようですね！新しいクラスはやくなれるといいですね！特に女子と・・ってあ・・昼神君まだ・・」
「・・・」
　成瀬さんはあの事件のトラウマをすっかり克服していたようだが俺はそうはいけない・・愛する人に目の前で死なれた悲しみそしてもう二度とあんな事になりたくない一心から恋愛を遠ざけていた
「あの私・・すみません！」
「いいよ別に・・」
「・・いなりや、ちょっと歯ぁ食いしばれや！」
　バキ！良田に突然顔を殴られる
　それも良田の超能力「肉体強化＆硬化」された拳で
「グハッ!?」
「良田君いきなり何を!?」
「いなりや・お前がそんなんでどうすんだよ？気持ちは痛い程よく分かる俺も桜にも・・だけどな桜はこうして克服してるんだ！お前もちったあ前向いて歩けや！」
「ッ！・・」
「俺にはこの肉体強化硬化能力でこれから先もずっと桜のことを守り続けていく！お前

にも力があるじゃないか！今のお前ならやれるはずだろ?!」
「・・だけど俺には・・」
大切にしたいと想える人なんてそう簡単にはいない
「そんならこれから探せばいいだろ」
良田に一喝入れられる
「・・ああ！」
目が覚めた俺は前を向いて歩き出した
そしてとある日の放課後から俺の運命が再び始まっていった

ＥＰＶ「三年後のとある日２」

二年に進級してから数日経ったとある日の放課後
バシィー！
「ハッ!?」
「誰も助けてなんて一言も言ってません！」
俺は何故か一人の少女に頬をひっぱたかれた
ええっと・・なんでこうなったんだっけ？
今から十五分程ぐらい前
「ヘッヘェ～！」
超能力社会で法が整備されたとはいえ未だに完全とはいえず超能力を使った事件が後を絶たない
「姉ちゃんよお～俺達と遊ばない？ほらほら～」
「嫌ですってば！離してよこの手を！」
帽子を深く被った少女に魔の手が遅いかかろうとしている
「ああ～ん？兄貴お願いしやっす！」

ガラ悪下っ端の呼び出しで大柄の男が出てきて
「おうよお！俺様の超能力の炎で言う事嫌でも聞かせてやるぜえ～！」
ボ！
「ヒッ!?・・・」
「ハァー・・馬鹿がまた増えた・・あんまり能力使いたくなんかねえってのに・・ったく仕方ない！オイ！そこのアホ野郎共！その子の手を離せよ！」
俺はまずは仲裁に入る
「ああ～ん？なんだテメェ？俺達に喧嘩売ってんのかあ?!」
案の定睨み付けられる
「兄貴いこんな奴なんか兄貴の炎でやっつけちゃってくださいよ」
「おうよ！俺様達に逆らったことを後悔させてやるぜえ！おらあ！」
ボ！火粉が俺に向かってくるがこんなもの容易く回避できる
「ナニ!?」
「どうしたコレでおしまいか？」
俺は火粉野郎を挑発する
「クッ!?だが避けてばかりじゃあなあ！この俺様を怒らせたことも後悔させてやるう！」

「！」

野郎が最大出力で撃ってくる

ゴオ！

「あひゃっはああー！どうだまいったか！」

「あ!?・・兄貴・・」

「んどうしたってんだ一体？奴には直撃したんだぜ」

「いやそうじゃなくて後ろ・・」

「ん～？なんだとお!?」

「残念だったな！後ろはとらせてもらったぞ！」

「まさか!?・・俺様のあの一撃を喰らって立っているだとお!?」

「つくずく脳筋馬鹿だなお前等は・・お前には俺が受けたように見えたようだがアレは能力で作った俺の残像さ！」

「ナニィー!?」

「！あ・・兄貴コイツ・・噂の「デスコードハウリング」ですよ！」

「なん!?・・」

「そろそろ片付けさせてもらうよ！デスコードコネクトオン！ダークウィップ！」

俺は手を野郎の背中に当ててコード穴を転送しその中から紫色の鞭を取出攻撃する

バシュッ!シュル!
「ウオギャアッ!?・・」
縛りあげて彼等をＮＤＡ〔超能力犯罪対策科〕に引き渡した
「ふう・・危ない所だったな」
襲われてた少女に手を差し伸べようとして現在に至る
「お前怯えてたじゃねえかよ!」
「違うもん!あれくらい私一人でどうにかできたもん・・」
一つの疑問が浮かぶ　何故この子が自分一人で解決しようとしたのか
「ってことはお前も能力者なのか?」
無能力で向かおうとする者はそういない
「・・・」
少女は何も答えずに立ち去ろうとする
「オイ!せめて一言くらいちゃんと礼も言えねえのかよ?!」
頭にきた俺はちょっとキレて彼女の帽子をつかんで
「キャッ!?」
転ばせてしまった
「う～・・分かりました・・ありがとうございます・・」

「あ・・すまん！分かって・・ってえ!?・・・」

帽子で隠れてて見えなかった少女の顔を見て俺は驚愕した

そう・・何故なら彼女の顔立、体格といいなにからなにまで死んだ真奈夏と似ていたからだ

ＥＰⅥ「何気なく回り始めた日々」

「・・」

俺はあの少女と別れてからずっと考えていた

どう見てもあの少女は真奈夏に似すぎていたからだ

もしかして生き別れの妹とか？・・いやそんな事真奈夏は一言も言ってなかったはずだ

やっぱり他人の空似だったのか・・

翌日　昼休

「よおいなりやなんか昨日出会いあったか？」

「昼休に来て早々にソレかよ・・」

どうする？昨日の事良田に話した方がいいのか？

「良田聞いてくれ！実は・・」

「あっヤッベェ！学食のパン売切ちまう！お前も早く来い」

「おい・・まあ後でもいいか・・」

俺は良田の後から学食にいった

七分後

「いっやーよかったあー桜が偶然並んでいてくれたおかげでギリギリ最後の焼キソバパン間に合ったぜ！」

「私毎日お弁当なんだけど今日はお母さんが寝坊して作れなかったんだ。だから良田君も来るだろうと思ってて並んどいてあげたんだ」

「流石俺の彼女！ありがとうな！桜」

「キャッ！」

ゴゴゴ！

「このリア充があ・・爆ぜろぉー！」

「うう・・俺だって欲しいのに・・頼むから末永く爆発してくれ・・」

この馬鹿ップル・・リア貧共に妬まれの念を向けられてるぞ

「隣いいかしら？」

「ん？ああ・・」

隣に誰かが来たので了承したのだが

「お・・お前は!?」

「ん？」

「あなたは!?」

「ん？いなりや、桜どうかしたかって・・はいい!?」
　良田も成瀬さんもこの驚きである
「お前この学園の生徒だったのかよ・・」
　昨日の真奈夏似の少女だった
「いなりやお前アレって・・」
　良田が質問してくる
「ああ、似てるだろ・・」
「うむどう見ても」
「一体全体どうしたものか・・」
「何話してんですかー？」
「お前・・俺の事覚えてるか？」
「・・あー！」
「今頃気付いたのかよｗ」
　で
「私は一年四組の姫沙川姫利です・・」
「俺は昼神十七夜二年だ・・ってやっぱ他人の空似だったか・・」
「？」

「いやいやなんでもない！」
　こんな事知り合って間もない人に話せるわけがないなら
「なあ、姫沙川お前さ、西条真奈夏って知らないか？」
「誰ソイツ？」
「いや知らないならいいんだ・・」
「昨日はその・・ありがとう・・」
「ちゃんとお礼言わなかったけ？」
「・・改めて言ったまでよ！／／／よろしく先輩」
「・・」
　真奈夏とはまるで違うな・・

ＥＰⅦ「絶つ者」

真奈夏に似た後輩姫沙川姫利に出会ってから数日がたった昼休

「・・姫沙川なんでお前当たり前のように俺のクラスに来ているんだよ?」

「／／／まだ先輩達以外に友達できてないんだからしょうがないでしょ!文句ある?」

「あのなあ・・威嚇で能力使うのやめろ」

俺の前には姫沙川が能力で作った氷の塊がロックオンされてる

「お前・・苦手なのに立ち向かおうとしていたのかよ・・」

「うるさい!／／／」

どうすりゃいいんだよ?・・・

夕方帰宅すると

「お?叔父さんから手紙が届いてるな・・あれから連絡絶ってたが何してたんだ?」

その手紙を読みながらリビングに行くと

ガラッ!

「・・」

バタン!今の見間違いかな?ゴシゴシ・・

カチャ・・
「・・なんでいる?!」
俺は唖然とする
「おー!久しぶりだな昼神の坊主!手紙読んでくれたか?」
「その手紙より先に着いててどうする!?」
ヤレヤレ・・叔父さんには毎回振り回される
「で・・今まで四年間も何処行ってたんです?」
「イギリス!」
「また色んな女性に頼まれたんでしょ?」
「まあな!」
なにかと叔父は女性に頼られやすい腕の持主のようで世界中を転々としている
「まあ聞いてくれや坊主、ワシは向こうでな孤児院の経営の一部を任されてたんじゃ」
「で?」
なんか嫌な予感しかしないんだが
「副医院長の権限と彼女達の希望もあってコッチに連れて来ちゃった・w・」
「ハアッ!?ちょっと待て叔父さん・・俺の三年前の出来事手紙で知っているはずでしょ?」

「あ～スマン見てなかった・ｗ・」
「んな!?・・」
この人は・・
「それじゃあご紹介しようか！」
「！」
そして三人の少女が入ってきたのだった

ＥＰⅧ「絶対なる鼓動の共鳴その１」

「！・・・」

叔父さんの呼びかけに三人の銀髪少女が入ってきた　てかウチの何処に待機させてたんだ!?

「・・」

サッ　三人共俺を見るなり何故か叔父さんの後ろに隠れてしまった

「こらこらコイツはワシの弟の孫じゃ怖くないぞ」

「ああ・・」

どうやら極度の人見知りらしい

「・・ホント?・・・」

「ああ、本当じゃ」

「・・」

ウッ・・なんか空気が段々と重くなってきた・・

「あーえっと・・俺は昼神十七夜　君達は?」

「・・」

誰も口を開いてくれない
「坊主言い忘れてた事があった！
実はなこの子達は三年前のクリスマスイヴからの記憶を失くしてるようなんじゃよ・・」
叔父さんが思い出したように言う
「はい!?・・なんで!?」
よりにもよって真奈夏が死んだ同じ日に!?
「詳しくは分からないのじゃが医院長の話ではどうやら両親が何かのいさかい事に巻き込まれて亡くなったそうなんじゃ・・それのショックなのかもしれぬ・・」
「それじゃあ・・」
「自分達が姉妹だってことと名前だけはなんとか言えたようじゃがの・・まあとりあえず紹介しよう。左から長女の遊恩　次女の遊羽根　三女の梨恋だ」
「・・」
この子達もトラウマを抱えて生きてきたのか
「でなワシもしばらく日本にいるんだがどうにもこっちの仕事が忙しくてな・・坊主お前に面倒見てやってほしいのじゃ！
お前の義姉妹となるな！」

「!?最初ッからその気だったな！」
「じゃそういうことでえー！・ｗ・」
「って待てえーい！・・逃げられた・・」
　やられた・・で
「・・叔父さんが言うなら信じる・・いないな・・」
!?」
　変なアダ名付けられた!?
「・・そう呼んじゃダメ？・・」
「いや・・別にいいけど・・」
「・・お姉ちゃんがそう呼ぶなら私もそう呼びたい・・」
「私も・・」
　全員かなりノンビリすぎる・・
「・・ねえ？・・」
「ん？なんだ？」
「お腹空いた・・いないなご飯・・」
「あーはいはい分かったよ」
　なんか後先物凄く思いやられる気しかしないんだが・・

ＥＰⅨ「絶対なる鼓動の共鳴そのⅡ」

「・・重い・・」
遊恩達と一緒に寝ていたのだが彼女達の寝相が悪くてあ、そこ蹴らないでくれ・・ちょ!?痛ぇ!・・
翌日学園二時間目休
「うー・・まだ寝足りねぇ・・」
「なんかあったんかいな? いなりや」
良田が聞いてくる
「ああそれがな・・」
事のあらましを話す
「・・ほーんあの叔父さんがねぇ・・ってン?」
「どうした?」
良田の動きが一瞬止まった
「今・・お前の話したような子が廊下を通ったような・・」
「ハッ!?まさか・・」

きっと見間違いじゃないなこのタイミングだと・・オイオイ勘弁してくれよ・・ちゃんと留守番しとけって言っておいたのに・・

「急いで探してくる」

「オイ!?もう授業始まっちまうぞ?!」

「・・・」

エスケープする訳にもいかず結局昼休まで彼女を探しに行けなかった

昼休

「アイツ・・一体何処をウロついてんだよ?・・あのなりだほっとかれるワケがないとすると・・あそこしかないな!」

食堂

「はあはあ・・おそらくココにいるはず・・ってン?」

食堂を入ってすぐの席で

「アイツ・・姫砂川!?・・」

見ると遊恩が姫砂川と楽しそうに喋っていた

「おい?・・」

「なんですか先輩?乙女の楽しい談笑の邪魔でもしにきたんですかあ?」

「違うわい!それより・・」

「ああこの子ね昼休なってすぐ食堂行こうとしてたらなんか迷子になってたようだから
ついでに連れてきて話相手になってあげてたのよ」
「あ！・・いないな！」
「おわっとお!?」
　遊恩は俺を見つけて抱きついてくる
「先輩・・何してんですか?・・・」
　ビキン！嫌な音が
「待て！話を聞いてくれ！」
　姫砂川にも事情を話した
「先輩に突然できた義理の妹ぉ!?」
「ああ・・」
「・・～ー」
　ビキビキ！ン?再び嫌な音が・・
「待て待て！何故今の話でキレてんだよ!?」
「うるさい！うるさい！」
　姫砂川は俺めがけて氷の塊を投げてくる
「姫砂川さん！俺達も加勢しますよ！」

「あらありがとう！☆ミ」

出た！姫砂川の親衛隊の奴等が・・

「ヒッヘー！このリア充があ爆ぜろお！」

「ノアッーー!?」

翌日　遊恩と遊羽根は俺のクラスに転入し、通う事となった

「最初からこうすればよかった・・」

後悔先に立たずとは正にこのことであるが・・何故か莉恋だけは学園に通う事〔外出すら〕を嫌がって部屋に閉じこもっていた

ＥＰＸ「輪」

「転校生だと？」
「ああ、どうやら明日から俺等のクラスに入ってくるらしい」
「またなんでこんな時期に？」
「超能力社会だぜ　この学園はスカウトもやるようだしそれでじゃね？」
「はあ・・」
　解決しなきゃいけない問題が山積みなんだがこれ以上厄介事は勘弁願いたいのだが・・まあ俺の少しの希望は儚くも打ち砕かれてしまうのだった
　翌日
「ふあ～・・おい遊恩、遊羽起きろー！梨恋は・・やっぱり部屋に閉じこもっているのか・・いつかどうにかしてやらないといけないな・・」
　重い頭を抱えながらとっとと学園に向かう
　校内
「ちょいと早く出すぎたか？教室空いてねえ・・」
　鍵を取りにいこうとしたその時

「ちょっといいかしら？」
「ん？」
女子生徒に声をかけられた
「なんだ？急いでるんだが」
「二年E組ってここで合ってるのかしら？」
俺のクラスを聞くってことはこの子が例の転校生か？
「ああ、合ってるが鍵閉まってるから今入れないぞ」
「だったら・・」
転校生が俺に近付いてきて
「さっさと取りにいってきてね！☆」
「？言われなくてもそのつもりだが」
「!?」
転校生が驚いた様な顔を見せる
何々だ一体？
ＨＬ
「今日からこのクラスに転校してきました藍摘美愛です☆！皆よろしくね！☆」
「・・」

ん!?なんだこの沈黙は・・
「わあーー!!!?」
「何だ何だ!?」
「藍摘美愛って今大人気のグラビアアイドルのあの!?嘘だろ!?本物かよ!?」
周りの男子とごく一部の女子が騒ぎ立てる
「あ～俺も知ってるｗ知らないのはお前だけかいなりやｗ」
「悪かったな!今まで世界塞ぎこんでて・・」
「んでえ～そこのあなた!」
「ん?俺!?」
で藍摘さんが俺を指してきた
最早嫌な予感しかしないのは俺の気のせいであってほしいと僅かにも思いたくなるだけど
「そう!あなたを私の彼氏にしたいの!どこまでも追いかけるから!☆」
!?サラッと爆弾発言しましたよぉこの人・・
「なんで!?」
そして例のごとく
「ほおおおおう・・」

野郎共の目が目があー！・・・

ＥＰ１１「巻所１」

転校生にとんでもない宣言をされてから二日後の放課後
「・・なあ何か悪寒というか視線を感じるんだが・・」
「?俺達以外に誰もいないが?」
良田達はそう言うが
「そうか・・」
「・・」
その翌日
「何!?」
ある事件で学園内は持ちきりになっていた
「ああ、俺の陸上部の先輩のクラスと一年Ｃ組の一人、二年Ｄ組にもそれぞれ一人ずつ男子生徒が四日前から行方不明らしい」
「怖いよね・・」
成瀬さん達女子生徒も怖がっている
「家出とかじゃねえのか?」

「いや、放課後から帰ってないらしいぜ」
「それは大変だな」
昨日感じた視線って・・まさかな
その時は対して気にもしていなかったがまさかこんな事になるなんて思いもしなかったんだ
その日の夜
「やべぇ何故か眠れない・・仕方ねえコンビニにでも行ってくるか」
俺は何故か眠れず外をブラブラする事にしたのだが
「夜食はこれでＯＫと・・後はどうするかな」
漫画の立読にも飽きてコンビニを出た直後
「！誰だ!?」
また視線を感じ振り向くが街灯に照らされた電柱があるだけだった
「気のせいか・・」
向き直したその時　バッ！
「!?」
暗闇から影が現れ俺の手を掴み口を塞がされた
駄目だ・・意識が遠のいていく・・

バタッ！
俺は倒れ伏してしまった
俺はどうなってしまうんだろう？

EP12「巻所Ⅱ」

「・・ぐうイテテ・・一体俺はどうなってしまったんだ?」
突然何者かに襲われ意識を失ってしまっていた俺は先程目覚め急いで現在状況を確認する
「・・何処なんだよここは?・・・」
暗闇で分からない・・恐らくはこの街の何処かにある廃墟の地下室か何かであろうが
「お?飯は無事だなって・・こんな事やってる場合じゃねえ!」
一人ツッコミをやっていると　バガタッ!
「!」
人が来る　まず間違い無く俺をこんな所に連れてきた犯人であることだろう
「おい!俺をこんな所に閉じ込めてどうしたい気・・なん・・だ?・・・!?」
「!・・・」
やって来たのは少し虚ろな目をした儚げな少女だった
コイツが犯人?
いや違うと思う恐らく誰かに脅されて仕方無くこんな事をやらさてる?

しかし俺の疑問は直後の少女の驚くべき行動で抹消された

「・・」

少女は無言で俺の所に来て

スッ！と手を翳した　すると

「!?」

俺の両手がどこからか現れたのか鎖に繋がれ拘束されてしまう

「なんだよコレ!?・・まさか一連の事件の犯人は君なのか!?」

「・・」

やはり少女は無言のまま答えてくれない

鎖の能力者・・ヤバイなこの状況は

ＥＰ１３「巻所Ⅲ」

「・・」

あれからどれくらいの時間が経ったのだろう・・

恐らくもう三日は経っている・・遊恩達は心配して探してくれているだろうか？

でもここから脱出したくても不可能なのだ

「くそっ！コレさえ外れれば！・・・」

カタン！

不味い！少女が戻ってくる！俺は何事もなかったかのように振舞う

「・・」

少女はやはり無言のままだ

タン

少女は何かを置いた

見ると明らかにほとんどがノコギリなどの凶器ばかりあと飯

「・・」

嫌な予感しかしない

「・・」

少女はふと何かをしにいくのかその場から離れた

「・・そうだ!・・・これなら!・・・今だ!」

俺は少女が離れたのを確認すると奇跡的に空いてる足で小型ノコギリを挟んでそれで鎖を切り落とそうと試みる

「届けぇー!・」

届いた　そして素早く鎖を切り落とした

さてこれからどうする?

この地下の何処かにいるであろう先輩達を探した方がいいな・・

辺りを探す

大分奥へ進んでいくと扉があった

「ここか!」

扉を開ける

すると

「!?」

異常な光景がそこにはあったのだ

「なんだこれは!?・・」

先輩達を発見したはいいが様子がおかしかった
確認する
「よかった・・生きてる!・・だけどこれは・・」
生きてはいる・・だがまるで何かが欠けたような顔だった
触れてみると
ブウン!
奇妙な映像が流れ込んできた
「これはまさか・・」
ガタン!
「!しまった!?」
少女がいつの間にか戻ってきていた
「ヒッ!?・・・」
少女が怯えると同時に無数の鎖が彼女の周りを囲んでいた
その頃
「いなりやの奴一体どこに消えたんだ?・・まさか例の事件に巻き込まれたんじゃ・・」
遊恩から十七夜がいなくなったと聞いた良田は例の事件について調べてみたが微塵も手掛かりは掴めなかった

「くそ！・・・」
「・・・君も私を裏切るの?!・・・」
少女がそう叫ぶと同時に俺に向かって鎖が放たれる
「不味い!?・・・」
鎖が俺の胸に刺さる
「ガハッ!?・・・」
一度は死を覚悟したが
「!?」
俺のデスコードハウリングの紋様が増え光った
「これは！・・コードの新しい能力が開花した!?・・君はこんな事をやっちゃ駄目だ！コード検索！ココロコネクト！」
「あう!?・・・」
俺は少女に触れて彼女の心の傷を視る
「これは！・・・やはり！」
先輩達は彼女の能力によって心を抜かれたのだ
だけど何故こんな事を？
彼女の記憶を巻き戻す

「なんで私のこと捨てるの!?」
「ああ?遊びだよ遊び　お前なんかを愛したことは一度もねえ」
「酷イ!」
「う・・うぐわあああああー!?・・」
「・・私のこと裏切れないようにしなくちゃ・・」
先輩はどうやら女遊び癖が悪かったようだ
後の二人は寂しさを埋める為に連れてこられたようだ
「これは・・なんともいえないな・・九割方先輩が悪いじゃないか・・」
俺は呆れ果てる
能力を解除し現実世界に戻ると
「・・ひっく・・ひっく・・」
少女は泣いていた
俺は彼女に何か出来る事があるだろうか?
「・・」
俺は少女にそっと手を差し伸べる
「心の傷・・俺に癒せるかどうか不確かだけどこれだけは言える!俺はお前の友達になり裏切らないって!」

「！・・ホント？・・」
少女は失くしてしまっていた笑顔を取り戻す
「ああ本当だ、俺は昼神十七夜　お前は？」
「・・深森心愛・・」
「さ俺と一緒に帰ろう！」
俺は深森の手を取り帰路についた

キャラクター設定集第０部

1、昼神十七夜〔ひるかみいなや〕

本作の主人公。　東京にある神支名学園の高等部二年。

とある事件から恋愛から遠ざかって生きてきたが・・とある日の親友によって目を覚まされた後ある出会いを果たすことによって成長していくが・・。

学園では能力名で呼ばれ周囲に恐れられている。

能力は「デスコードハウリング」

事件の後不良達のイジメを受けている最中に覚醒した。

紋様がいくつかあるようだが能力の解放にはそれが関係しているようだ　現在の所

1、相手に触れてコンセント穴を生成しそこから鞭などの武器を生成する

2、自身に触れさせて残像を生成する

3、相手の胸に触れて心の傷を視る能力「ココロコネクト」　この能力が発動出来るのは異性限定であり能力が→の相手には使えない

一部の超能力だけは彼には通じない

だがそれには単的な欠陥がある

2、西条真奈夏〔さいじょうまなか〕
隣街に住んでおり別の学校に通いながらも主人公十七夜と付き合っていたヒロイン
クリスマスイヴの夕方、想いに悩んだ彼女は十七夜のクラスメイトであった成瀬桜を含め四人を殺傷した傷害事件を起こしたあげく彼の目の前で自殺してしまった
彼女の死をキッカケに世界の人々が超能力に目覚め始めた
3、阿久富良田〔あくとみりょうた〕
十七夜の幼稚園時代からの腐れ縁の悪友であり親友　彼を「いなりや」とアダ名で呼んでいる
偶然お使いで隣街を訪れており上記ヒロインが起こした事件に半ば巻き込まれたが彼は一時的に気絶させられただけですんだ
目覚めた後事件の被害者であった成瀬桜を助けた事をキッカケに彼女と事件後の三日後に付き合っている
能力は「肉体強化＆硬化」一度十六夜の目を覚まさせる為に最小限の力を使って彼を殴った
それからは成瀬桜を守る為に使うと公言
不良に絡まれる事が多いらしく傷が絶えない
4、成瀬桜　→ヒロインが起こした事件の被害者であり唯一の生存者　彼女は手を刺

されたが十六夜と良田に救助され奇跡的に助かった　事件後良田に告白し付き合っている

能力は「癒の緑光」手から緑色の光を出し傷を癒す力

主に不良と喧嘩する事が多い良田の傷を治癒している事が多い

5、姫紗川姫利〔きさかわひめり〕十二月十九日　本作のメインヒロイン1

高等部一年

ある日不良能力者勢に絡まれている所を十七夜に助けられその後学園で彼と再会するが・・　学園では人気があり親衛隊までできている

何故か死んだ→ヒロインの西条真奈夏に似ていて・・

素直になれずに彼と衝突する事もしばしば

能力は「アイスＳＥＥＤ」自由自在に浮遊する氷の塊を召喚し攻撃できる力　だが感情の乱れで暴走してしまう事が欠点であり・・

6、工矛路総治郎　十七夜の父親の弟で叔父

女性の頼みには一切断れずに世界中を回っては解決してきたがある事で日本に帰ってきた

十七夜が住むマンションの下にある一軒家を借りている

7、昼神遊恩〔ゆおん〕十一月十一日　メインヒロイン2　総治郎がイギリスの孤児

院から連れてきた三姉妹の長女　叔父に言われ十七夜の家族となる
人見知りが激しく最初は叔父の背中に隠れていたが彼と打ち解けた後は彼を「いないな」と呼び慕うようになる
三年前の事件と同日に彼女達の両親が亡くなりそのせいなのか以前の記憶を失ってしまっている
学園に勝手についてきて以来通うこととなる
上記ヒロイン姫紗川姫利と友達になる
能力は「エクスプスヴァンパイアウィルス」　願った思い思いの力を付与させるウィルスを自身と対象者の血を引き換えに注入させられる力
その際に発生する血量は願いの大きさによって決まる
しかし欠点として大きすぎる願いを具現化するには命の危険も伴う上に使用時の身体的リスクも大きいので総治郎にあまり使わないようにと言われている
８、昼神遊羽〔ゆう〕　同じ　メインヒロイン３　次女
長女と同じく十七夜に懐き学園に通うこととなる
能力は長女の細菌Ｖｅｒである「エクスプスヴァンパイアビールス」細菌の為発現期間が短く大きすぎる願いを叶える事は不可　その為身体的リスクが少ない
９．昼神梨恋〔りこ〕　同じ　メインヒロイン４　三女

姉達と違い何故か学園に通いたがらず自室に引き籠りである
それが何故なのかは現在不明　能力も不明
１０、藍摘美愛〔あいつみみあ〕七月２１日　メインヒロイン５
大人気の現役グラビアアイドルで十七夜達のクラスに転校してきた少女
彼女の超能力が通じない十七夜に興味を持ち彼女になりたい宣言してくる　その後も隙あらばと彼にスキンシップしてくる
能力は「サキュバス」　フェロモンをふりまき男性の性欲を操作する能力
上記でも書いた通り十七夜には通じないが・・